

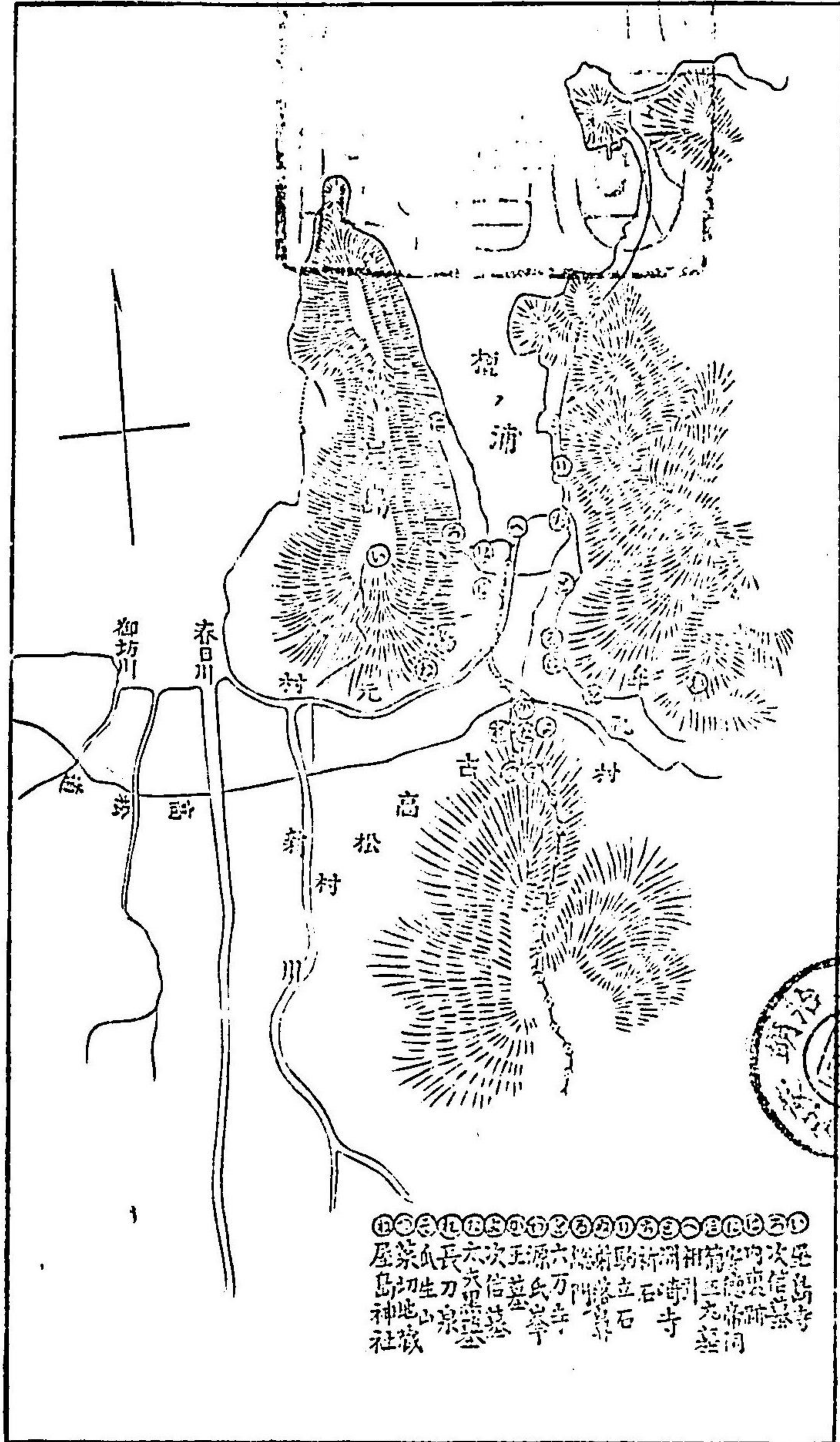
69
108

屋島名勝手引草

全

69
of

屋島附近之地圖



屋嶋名勝手引草

讚岐 屋嶋保勝會 編輯

屋嶋は香川縣山田郡に在りて高松市を距る里許其東南は三木郡に接せり往昔源平戦争の當時は海中の一嶋嶼ありしも桑滄の變現今は半嶋の状をみせり然れども北方は海中に斗出し南方は纒に一帶の淺水を以て陸地と隔絶すれば其嶋の名稱あるも亦敢て空しからず其登路支徑太た多しと雖も南方瀧元村よりする者と東方壇浦よりする者を以て本道とす其瀧元村よりする者は頂上屋嶋寺に至る十八丁にして一丁毎に石佛を置き丁數を刻し以て標識とす抑元曆二年源平の戦争ありし遺跡は即山の東麓壇浦と稱せる處より南方三木郡牟禮村の邊とす其詳細の條項は各別に之れを録す

○不食梨 瀧元村よりする本道にあり僧空海の遺跡と云ふ事長ければ之れを畧す

○阿吽並に六字の名号 阿吽の二字並に六字の名号を刻せる碑石あり僧空海の筆跡と云

○疊石 殆んど絶頂に達せんとするの處數十歩の間奇石層々相倚る者名づけて疊石と云ふ此邊老樹鬱蒼自ら山氣の凄然たるを覺ゆ

やせりしてこゝに假寝のたゝみ石月は今よひの主なりけり

西行法師

○屋嶋寺 南面山千光院と号す眞言宗京都仁和寺の末寺にして中本寺の資格を有す四國八十八箇所の一にして八十四番の札所あり

二王門 四天門 阿波太守松平 志摩守建之 本堂

弘仁元年僧空海之れを創立す後覺長六年に至り大に破壊せるを以て當時住職龍嚴なる

者徳川將軍の教書を得て普く諸國に勸進して之れを再建し元和四年落成す然れども來迎柱二本は依然舊物を存す

大師堂 釋迦堂 千體佛堂

護摩堂 鐘樓 庫裡客殿

客殿の庭園土質一白殆も積雪の如し土人之れを雪庭と稱す

鐘樓掲る所の梵鐘銘辭あり

左に之れを録す

奉鑄讃岐國屋島千光院洪鐘一口

右洪鐘者勸進聖人當國ノ住人沙門蓮阿彌陀佛爲ニ濟ニ度群生ニ可レ奉ニ鐘ヲ當院ニ洪鐘之願

云以ニ承久元年四月ヲ余上洛於ニ六條町ニ勸ニ十方ノ檀那ヲ以テ
貞應第二曆十月ヲ奉レ鑄レ之矣

貞應二年 癸未 十月廿六日

勸進聖人蓮阿彌陀佛

鑄師散位 土師宗久

寺記曰天平勝寶六年甲午の歲唐僧陽州龍興寺の鑑真ある者舟中より此山を望み舟を山下に繫きて登山せり時馬蘇山人なる者出迎て曰此山七佛陀法施行之地あるも人未だ居ると能はず故に吾れ子に此山を予へ衆生を濟度せしめんとす鑑真大に悦び因て一室を築き普賢の像及華嚴經を其中に置き去て京師に赴く

天皇深く鑑真を崇信し爲めに壇を東大寺に作り以て其道を學ぶ乃ち鑑真馬蘇の言を以て之れを奏す因て鑑真に屋嶋ヲ賜ふ於是鑑真復ひ此山に來り一庵を結ひ其弟子惠海に一鉢を予へ普賢堂を北嶺に經營せしめ十願王の像を置き且坊舎を建て僧徒をして居らしむ爾來僧徒

飛鉢ひはつの法ほふを修しゆし以て生計せいけいを營えいめるも後のち故ゆゑあつて止とどむ天曆てんりつ中明達ちやうめいと云いふ住僧ぢゆうそうあり學德兼備がくとくけんびの明匠めいじやうなり曾まじて一夏いつげ九旬くじゆんの間ま五大明王ごだいめいおうの秘法ひほふを修しゆし大に感應かんおんを現あらわす云い其後そのち慶長けいぢやう中龍巖ちゆうりやんと云いふ住僧ぢゆうそうあり織田おだ右府みぎのふ之臣そのおみ矢野やの駿河守すまののりの男おとこあり亦また學德兼全がくとくけんぜんの明僧めいそうにして寺門じもんの興營こうえいに盡力じんりきし徳川とくせん家康いえやすの教書けうしよを得て天下てんかに勸進くわんじんし大に伽藍がらんを修營しゆえいす萬治まんぢ中ちゆうに至いたり龍盛りゆうせいと云いふ住僧ぢゆうそうも亦また堂宇どううを修營しゆえいし力を傳法でんぽふに盡じんすと云い長録ちやうろく中普ふ一國師いつこくしと云いへる高僧かうそう當寺たうじに住職ぢゆうしやくせしと寺記じきに見みへたりと雖なほも其事跡そのじせき詳しやうあらす

當寺たうじは往古かうこより高二たうに十五石じふごせきを寺領じりやうとす生駒いごま氏當國ぢやうこくを領りやうするに當り慶長けいぢやう六年ろくにんに至いたり讚岐守せんぎしゆ一正まさ依よ舊きう之れを領りやうせしむ寛永くわんえい中松平まつだいら氏封ふうを當國たうこくに移うつすに及およびて讚岐守せんぎしゆ賴重らいぢゆう高たか五十九石ごじゅうしゆせき余あまを増ま加かすと云いふ

常寺じやうじ末寺まつじ六所むくしよあり地藏寺ぢぢじやう、喜阿彌寺きあみじ、延命寺えんめいじ、南泉寺なんせんじ、押光寺おしひかりじ、眞福寺まふくじとす然しかして山上やまの上に寺家じけ八所はつしよあり一乘坊いちじやうぼう、普賢院ふけんいん、寶積坊ほうじくぼう、靈巖坊りやうがんぼう、北きたの坊ぼう、元久院げんくゐん、長崎坊ちやうさきぼう、東乘坊とうじやうぼう是こゝあり然しかれども現今いまは廢絶はいせつし唯ただ其遺跡そのゐせきを存ぞんする耳みみ

○寶物 釋迦像しやくぢやうざう 北峯きたかみを堀出ほりだせる所ところにして現今いま釋迦堂しやくぢやうだう 陀羅尼經だらにきやう 崇曾親たかそうしん 不動像ふどうざう 釋迦文珠しやくぢやうぶんじゆ 普賢像ふけんざう 吼こゑ

哩伽羅りかろ不動像ふどうざう 善女ぜんにょ 龍王りゆうおう 像ざう 以上いじやう各弘かくかう 弘法かうぼう 大師像だいしざう 眞如親まにょしん 屋嶋山やじまのやま之圖のず 源平合戰圖げんへいがうせんず 以上いじやう土つち 屋島合やじまがひ

戰緣起せんげんぎ 筆者しんしや詳しやうあらす建長けんぢやう 觀世音くわんせいおん 小像せうざう 平景清へいけいせい守本尊しゆほんそんと云い像ざうの背せ 源平合戰圖げんへいがうせんず 屏風びやうぶ 天保十二年てんぽうじふにねん 阿波國あわのくに某氏あるし

寄附筆者きぶししんしや 神農像かむんざう 明趙文めいぢやうぶん 古瓦こゐ 文明十一年ぶんめいじゆいちねん八月はつがつ 龜井六郎かみいりくぢやう 書牘しよたつ 古木こき 白旗しろはた 那須家なすけ傳來てんらいの物もの 詳しやうあらす 達作たつさく 廿七日にじふしちにちとあり 龜井六郎かみいりくぢやう 書牘しよたつ 古木こき 白旗しろはた 那須家なすけ傳來てんらいの物もの

孫下野國すくなくのくに住那須資すなすけ 太刀たち 一振いちぢん 徳川家とくせんけ康遺物かうゐぶつ 舊藩主きうはんしゆ 古鏡こきやう 弓ゆみ 與次右衛門よじゑもん 作生駒さくいごま 准肥すんひ 觀音くわんおん 助文化すけぶん 十一年じゆいちねん 寄付きふ 太刀たち 一振いちぢん 徳川家とくせんけ康遺物かうゐぶつ 舊藩主きうはんしゆ 古鏡こきやう 弓ゆみ 與次右衛門よじゑもん 作生駒さくいごま 准肥すんひ 觀音くわんおん

銅像どうざう 隨代ずいだいの五劫ごけつ 思惟しゆい 阿彌陀像あみだざう 善道大ぜんだうだい 古油こあぶ 繪額えいがく 司馬江しまたゑ 漢筆かんぴ 其他その他 枚舉まいこに違ちがひらざるも之れを畧りやくす

○可正櫻かせいざくら 舊高松藩きうたかまつはん 土松平半左衛門つちまつだいらはんざゑもん 可正かせいの種たね ゆる所境內しよけいないにありて今猶いまなほ 燦然さんぜん 花はなを着つけ大に寺門じもんの風致ふうぢを添そへり可正かせい和歌わがあり左ひだりに記しす

此寺こゝのぢの庭にわに櫻うゑを植うゑちりん我後われのちの世よの花はなかすみなり 花はなの時人ときびとたてもしも問とならは可正かせい櫻うゑと名なをしらせしてよ

空蟬のからはいつこにうつむとも名をは屋嶋の峰におくなり

○經塚 南嶺にあり往古經卷を埋むと云後萬治年中齋藩主試に之れを發掘せしむるに一切經依然として全かりければ再ひ之れを埋むと云

○瑠璃寶池 本堂の東にあり寺記を按するに伽藍草創の時寶珠を根堂の前に埋め其境に池を築き寶池と稱すと蓋し之れあらん世談に源平戦争の時兵器の血を此池に洗ふと依て一つに之れを血の池と呼ぶ恐らくは齊東野人の語ならん

○古城跡 北嶺にあり日本書記云天智天皇八年十一月築大和國高安城讚岐國山田郡屋島城對馬國金田城云々是蓋西蕃の外寇に備ふる者今其墟を呼んで櫓岳と云ふ

○獅子靈巖 西峯にあり其形獅子に似たり依て名つく此處西北は三備地方南は阿讃の諸山出沒起伏近くは高松市街人烟稠密の狀香川、山田兩郡田畝林川の趣皆一眸の下に集り一呼答へんとする者の如し然して直下は蒼海波穩に島嶼落落風帆漁舟其間に往來する等所謂画手も到らざる者にして人をして應接暇あらざらしむ

獅巖眺望所三人傳。聯杖躋攀半嶺嶺。溪鳥不驚吟客側。風帆欲到酒盃前。數峯春鳥玻璃海。一刷晚霞金鏡天。元曆亂離誰又說。吾曹幸在太平年。漆谷山人 高松人

○談古嶺 屋島寺の東にあり明治三十年村雲尼王殿下此山に登り給ひし時玉趾を此に止められ寺僧及び土人を召し元曆年間の遺跡を尋ねられ即此處を談古嶺と命せられたり此處より下瞰すれば源平戦争の遺跡歴々皆鞋履の下に集り海水盆の如く山岳埜の如し然して其東南を眺望すれば山を越へて遙に志度浦を認め又更に一帶の山脈を越えて津田、鶴羽の諸浦を見る等風景絶佳名狀すべからず其東北は小豆嶋、播磨洋、淡路嶋近く目睫に接するが如し猶且秋天朗晴の日は水雲髣髴の際模糊一帶舞子の濱の松林を見るとありと云ふ凡佳光絶景と稱する處其數少あからずと雖ども皆眼界狹隘にして一局部を眺望するに過ぎず此地の如きは此等に比すれば双眸の觸る、所數十里にして實に宵壤の差異ある者なれば都人士等の未だ曾て夢にも見ざる所あり

○杜鵑の和歌 清和天皇御宇大江忠名ある人罪あり屋嶋に謫せらる一夜時鳥の聲を聞き和歌

を咏す 古今和歌集に載す 天皇之れを聞き給ひ其京師を慕ふを憐み其罪を赦すと云

杜鵑鳴く聲聞けはわかれにし古さとさへも戀しかりける

○源平古戰場 此山の東麓にあり海水灣を成し八栗山五剣の峰突兀雲間に聳へ一俯一仰人を
して今昔の感あらしむ此邊を総稱して壇の浦と云ふ

もろともにあはれは空にしられけり屋嶋にのこる秋のよの月

讃岐守頼重 舊高松藩主

官軍出狩ニ南州ニ。洋海ノ風雲寄ニ冕旒ヲ。戦合ニシテ縦横金鏑乱。城高フシテ左右旃旒流。臨レ營月
影懸ニ愁夢ヲ。打レ岸潮聲落ニ客舟ニ。遙憶英魂何處所。蒼々曉色星河悠。

讃岐守頼儀 舊高松藩主

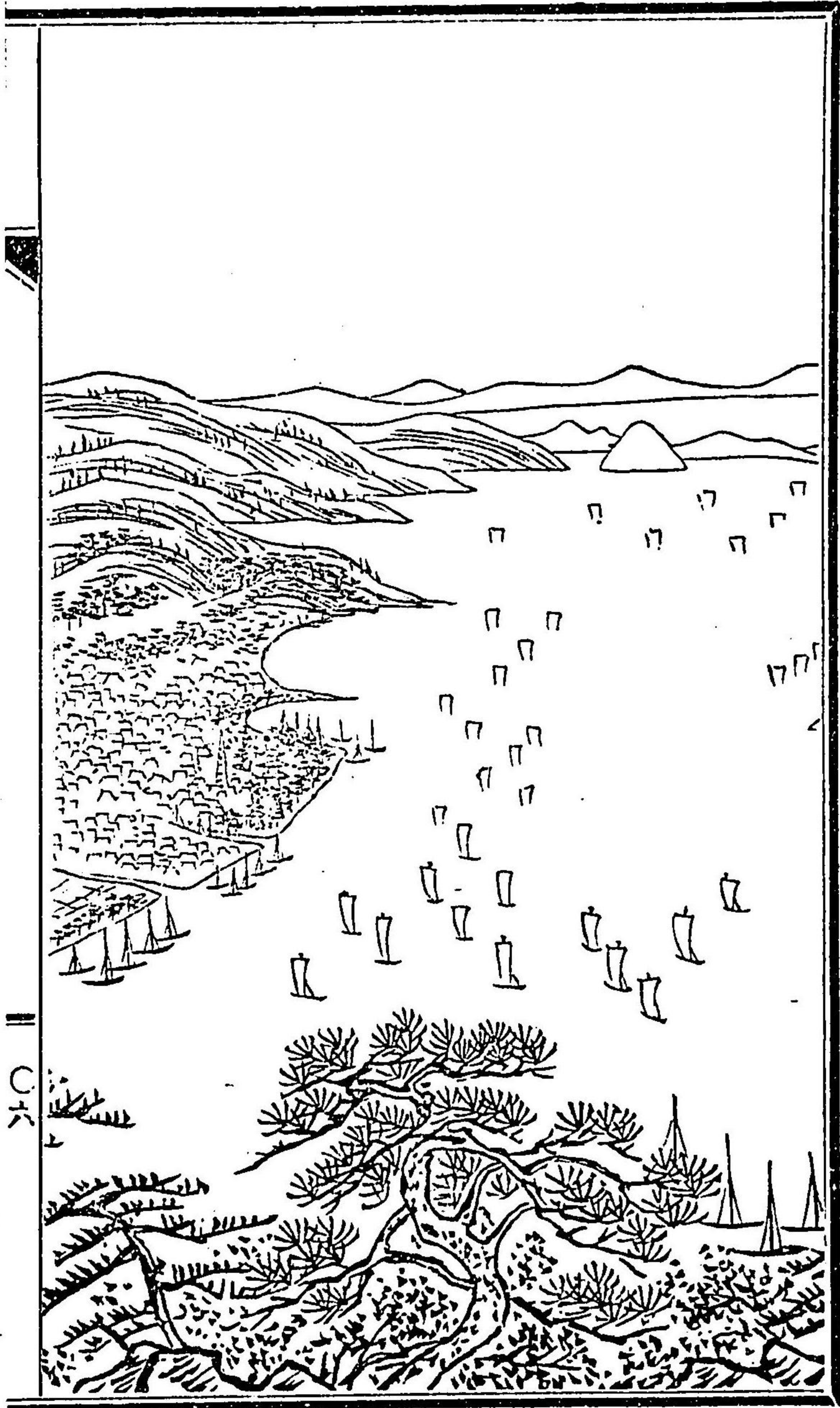
官軍一去帝王州。大海ノ風雲寄ニ冕旒ヲ。井底有レ緑還ニ玉璽。水濱誰復問ニ膠舟。舞姬
紈扇隨レ潮落。飛將ノ彫弓學レ月流。那知寒烟衰草外。幾人カ曾倚レ望郷樓。

桂山義樹 號鶴汀舊幕府儒員

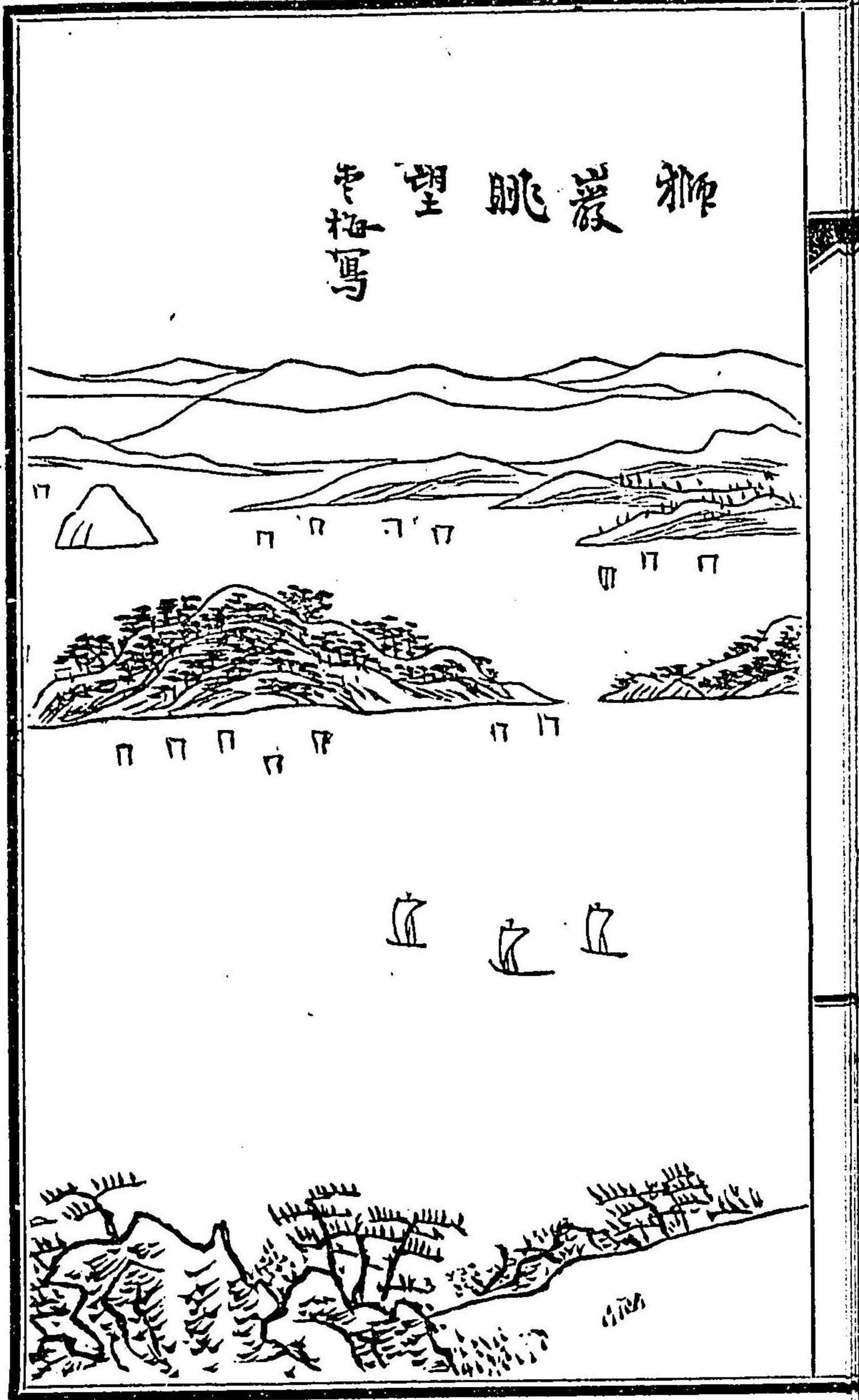
落日無レ光草木悲。行宮何處認ニ荒基。背レ山前レ水戦争ノ地。一抔二杭漂泊ノ時。英氣不レ磨
蹄印レ石。腥風猶見血成レ池。獨憐黄土埋ニ忠骨。便是江南墮淚碑。

片山達 號冲堂舊藩儒士

讀海南流寥且廓。無數烟嶼紛々簇。中在ニ一島ニ最幽奇。絶頂平横如ニ列屋。吾自ニ游跡到
笠原。日々倚レ欄遙矚レ目。蹠レ屐携レ筇思ニ一游。困レ人風雨連番惡。喜見今朝晴日和。三
五良朋共歡樂。相邀相待日遲々。載ニ得瓢酒一入ニ山麓。春日川東接ニ新川。二川水涸車
可レ逐。捨レ車步登ニ南面崖。岬逕峻峻又盤曲。十八地藏左右池。旅人庵外森々木。愈登愈
登路愈峻。老脚無レ力氣喘促。不食梨前暫休停。欲向ニ石佛ニ訪遺蹟。壘石留下步益艱。拂
石題レ詩復駐レ足。諸友健捷各先登。風吹ニ笑聲一落ニ頂嶽。攀ニ蘿捫レ壁幾回盤。仰見ニ王門
高竈。到レ頂先探獅子巖。煮レ酒席レ地坐ニ岬角。雌雄二鳴大小椎。星離碁布起又伏。鹽竈
依レ崖動ニ腥烟。漁舟點レ水如ニ螺殼。遙瞻直嶋水連天。古帝行宮雲漠々。把レ酒臨レ風發ニ
長嘯。興狂已忘腰脚弱。斜陽欲レ沒暮色蒼。安得揮レ扇廻ニ日落。抛レ杯起向ニ寺東。行。未



六



柳 叢 眺 望
老 梅 寫

鶯稻首大悲閣。鑑真飛鉢落波間。空海經塚埋荒窟。古鐘樓畔瑠璃池。水色沙痕似赭渥。
相傳九郎駐軍時。曾將血刀池中濯。過池陟見五劍峯。橫插雲間鋒峭崿。緬懷戰爭元
曆年。境浦波寒風蕭々。八齡天子等孤雛。兩姓英雄爭逐鹿。黑木御所今無存。草白烟
荒聞鬼哭。低徊流連不忍去。無奈暮藹生深谷。勿々偕伴下重岡。林昏徑仄石如
鏃。行不得分倩人扶。幾番失足欲顛扑。六萬寺裏傳暮鐘。源峰雲黑望渺邈。下嶺行
過次信碑。吊忠爲澆一杯醪。此時昏黑不可行。眞箇夜游須秉燭。呼得回車尋路
回。每逢勝蹟徧停輻。故王齋館海風淒。行在終門野草綠。挂鞍古松枝已枯。埋馬荒
墳碑可讀。千古勝情半日游。無窮感慨溢胸腹。歸來旅燭猶殘明。忙將游跡信手錄。
歷々煙景一篇詩。時維丙戌二月初。

王治本 号黍園清國潮東人

○佐藤次信墓 屋山の東麓にあり此地の南方十餘丁を隔て三木郡牟禮村にも亦次信の墓あり
傳云此所の墓は眞に次信を葬りし者にあらざるも四國八十八箇所順拜者の通路あれば

舊藩主松平頼重 特に石碑を建て次信忠死の事跡を廣く世人に知らしめんとするの意に
出たるなりと

維壬午之夏。我君受封讚州。的爲維城助。確乎其忠貞真可觀焉。一日講武之暇。泛
蘭漿。飛彩鷁。吳歌越唱。逍遙屋島。偶覽佐藤次信戰死跡。茲乃命下吏。刊貞石。
建新碑。表義旌。貞於乎君之用。意也深矣哉。次信決死于元曆之昔。而卿恩于寬永
之今。奚其幸矣哉。乃命余作碑銘。遂書如左。曾渠系譜誕辰載曆日用事跡操行。舊
記所載。前史所傳。歷々焉。章々焉。胡贊余言。銘曰。

於皇次信兮。挺于濱危之場。酬恩致死兮。百世誰曰不剛。遇盤富錯兮。顯千鏡
之雄鋒。識定膽壯兮。誠依教養。有常尤可稱者兮。維夫在將之良。建碑刻石
兮。山高水長。寬永癸未仲夏

岡部玄又 舊藩儒員號拙齋

○安徳天皇社 同所深林の中にあり蓋往古土人の神靈を奉祀せし者ならん

○菊王丸墓 同所にあり

源平盛衰記曰能登守か童に菊王丸といふ者あり本は通盛の下人ありけるが越前三位うたれたのち其弟なればとて此人に付たりけるが崩黄糸かゞしの腹巻に左右の射鞆として三枚甲居首にさかし太刀抜て飛でかゝり次信か首を取らんとする四郎兵衛忠信たち留り引堅め放矢に菊王丸か腹巻の引合つと射貫れて一足もひかず俯し倒る忠信が郎等に八郎爲定小長刀をもつて開いて童か首をとらんとかゝる能登守童が首とられと太刀ぬきふりてつと寄童か手をとり引立てゑいゝ聲を出して舟に投入たり暫くは生ても有けん余りに強く投られて後言もせず死にけり

○内裡跡 安徳天皇社の十町斗り北字石塙と云へる所の山腹にあり

日本史曰。九月尾形維義犯太宰府。菊池高直原田種直等防。戰于博多。不利。天皇御腰輿。奔箱崎。公卿官人徒步。從焉。自箱崎。迂藤原秀遠山鹿城。御船至柳浦。謁宇佐宮。民部大輔紀光秀奉船百三十餘艘。遂至關岐。菊池胤益運阿波材。造行宮於屋嶋。阿。

波人田口成能將兵一千余騎來。四國將士悉應。成能以成能爲阿波守。

○洲崎寺 三木郡牟禮村にあり眺海山圓通院と號す眞言宗八栗寺の末寺なり

寺記を按するに當寺は元暦の頃大伽藍ありしが源氏來襲の時兵火の爲めに焦土となれり然るに源軍凱旋の日義經多く民家寺院を焼亡せしとを悔ひ寺僧を招き僧房再建の資を贈れりと云抑佐藤次信の戦死するや義經深く之れを憐み其屍を寺院に送り葬儀を行はしめんとせしも軍中棺槨の備へなければ當寺の住僧に命じ燼餘の堂扉を以て次信が遺體を載せ之れを葬らしめしに住僧讀經供養せしを以て布施として次信が守本尊瑪瑙石の水月觀世音の像を當寺に寄附せしと云ふ右燼餘の堂扉及び觀音の像は故あつて今紀伊國蘆邊寺に在り

○所石 同所海濱にあり下野國住人奈須與市宗高が扇を射たる時此石に向ひ祈念せりと云ふ

○駒立石 同所埴田の中にあり與市馬を立て扇を射し所あり所石及駒立石の石碑の文字は舊藩主松平頼重其臣三野輪野祿なる者に命じて書せしむと云ふ

盛衰記曰元暦二年二月廿日の事あるに源平又戦んとする所に沖より裝たる船一艘渚に向て

漕寄す柳の五重に紅の袴着て袖笠かつける女房あり又紅の扇に日出したるを枕に狹て船の
舳頭に立て是を射よを源氏の方を招たる此女房といふは建禮門院の后立の御とき千人の中
より撰出せる雜司に玉虫前とも又舞の前とも申今歳十九歳成ける雲の鬢の眉花の顔色雪
の膚繪に書とも筆にも及かたく折節夕日に輝きていと色ころ増りけれ斯りければ西國ま
でも召具せられたりけるを出されて此扇を立たり此あうぎといふは故高倉院殿嶋へ御幸の
とき三十本切立て明神に進奉あり皆紅に日出したる扇なり平家都を落たまひしとき殿嶋へ
參社あり神主佐伯景廣此扇をとり出して是は一人の御施入明神の御秘藏あり且は故院の御
情帝業の御守たるべしされば此扇を持せ給ひたらは敵の箭も却て其身にあたり候べしと祝
言して進らせたりけるを此を源氏射外したらは當家軍に勝べし射負せたらは源氏利を得る
なるべしとて軍の占形に予たてられたり角して女房は入にけり源氏は遙に是を見て當座の
母氣のおもしろさに目を驚かし心を迷はす者もあり此扇誰か射よと仰られんと肝繪を作り
かた唾を飲む者もあり判官島山を召す重忠は木蘭地の直垂に椀細目の鍔着て大中黒の箭負

所藤の弓の真中とり黒の馬の太く逞しきに金覆輪の鞍をき判官の弓手の脇にすゝみ出て長
まつて候義経は女にめづる者と平家にいふあるか角構たらは定て進出て興にいらん處をよ
き射手を用意して真中さし當てゝ射おとさんと手謀てど心得たりあの扇射られあんと宣
へば島山畏て君の仰家の面目と存するうへは仔細を申に及ばずただこれはゆかしき晴藝
なり重忠打物とりては鬼神といふとも更に辞退申まじ地體脚氣の者ある上に此間馬にふら
れて氣分をさし手もあらはに覺へはへる射るんじては私の耻はさる事にて源氏一族の御瑕
瑾と存す他人に仰よと申島山かく辞しける間諸人色をうしあへり判官は扱誰かあるべきと
尋玉へは島山當時御方には下野國住人那須太郎助宗が子に十郎兄弟ころ加様の小物は堅
く仕りうへ彼等を召るべし人は免し候はずとも強弓遠矢うち物あどの時は仰を禁るべしと
深く申切たりさらは十郎とて召されたる裾の直垂に洗革の鍔に片白の甲二十四さしたる白
羽の矢に笛籐の弓の塗籠たる真中取て渚を下りにさくつろげて参りたる判官あの扇を仕
れと仰す御誼の上は仔細を申にかよはぬとも一谷の岩石を落せしとき馬弱くして弓手の臂

を砂につかせて侍りしが灸治もいまた癒す小振して定の矢仕ども存せず弟與市冠者は小兵にて侍れども懸鳥的などはづるは希あり定の矢仕りぬべしと存す仰下さるべしと弟に譲て引へたりさらば與市召とてめされたり其日の装束は紺村濃の直垂に緋威の鎧鷹角反甲居頭になし二十四指たる中黒の箭負ひ滋藤の弓に赤銅造の太刀をおび宿赫白馬の太く逞きに洲崎に千鳥の飛散たる貝鞍かいて乗たりけるが進出て判官の前に弓とり直し畏れりあの扇仕れ晴の所作不覺すなどのたまふ與市仰を蒙り仔細申さんとする處に伊勢三郎義盛後藤兵衛尉實基等與市を判官の前に引居て面々の故障に日既に暮あんとす兄の十郎指申さへは仔細や有べき疾々急さぬへく海上くらくなりあばゆ、しき御方の大事なり早くくと云ければ與市實とおもひ甲をばぬぎ童にもたせ操鳥帽子引たて、海紅梅の鉢巻しめ手綱搔練扇の方へ打むかひける生年十七歳色まろく小髭生ひ弓の取やう馬の乗貌優ある男にぞ見へたりけり波うち際まぎにうちよせて弓手の沖を見わたせば主上を初奉り國母建禮門院小政所方々の女房たち御船其數漕こぎちらへ屋形くの前後に御簾も几帳もさいめきけり袴温卷の座まで

も楊梅桃李とかざりれたり鹽風にさるふ空燒は東の袖にぞ通ふらし妻手の沖を見渡せば平家の軍將屋島大臣をはじめ奉り皆甲冑を帶し數百艘の兵船をならべてこれを見る後の陸を顧れを源氏の大將軍大夫判官をはじめ大勢轡をならべて是を見る定の當りをしらざれば源氏の兵各手に汗を握りけるされば沖と渚も推ならへて何所も晴と思けりろこしも遠淺なり鞍爪鎧の菱縫板の浸る迄入たれども沛艾の馬あれば海中にもはやりけり手綱をゆりするすゑ鎖れども寄る小波に物怖しく足もとゝめず狂けり扇の方をいそぎ見れば折節西風吹來て船は觸舳も動つゝ扇枕にもたまらねばくるりと廻けり何所を射べしとも覺らず與市運の極めと悲しく眼をふささ心をしづめて歸命頂禮入幡大菩薩日本國中小神祇別して下野國日光宇都宮氏の御神那須大明神弓矢の冥加あるべくは扇を座席にさだめてたまへ源氏の運もさたまり家の果報も盡べくは矢を放たぬ前に海中に沈め給へと祈念して目を開きて見たりければ扇は座にぞ靜れる有聲に物の射にくきは夏山の滋緑の木間より遙に見ゆる小鳥を殺さずして射ころ大事なれ狭みて立たる扇なり神力すでに指副たり手の下なりと思ひて

十二束二伏の鏑矢を拔出し爪やりつゝ、滋藤の弓握りぶとあるにうち食せ能引しはし固めたり源氏の方より今少しうち入たまへうち入給へといふ七段ばかりを阻たり扇の紙には日を出したれば恐あり蚊目のほぞをと志して兵ど放つ浦響くまで鳴わたり蚊目より一寸置てふつと射切たりければ蚊目は船にとどまりて扇は空に上りつゝ、しはらく中にひらめきて海へさつと入にける折節夕日かゝやきて波に漂ふ有さまは龍田山の秋の暮河瀬の紅葉に似たりけり鳴箭は抜て潮にあり溼のうき草と覺へたり平家は艇をたゝいて女房も男房もあゝ射たりくど感しけり源氏は鞍の前輪箆をたゝいて射たりくど響ければ舟もどよみてる在ける紅の扇の水にたゝよふ面白さに玉蟲

時ならぬ花やもみちをみつる哉よし野初瀬の麓あらねど

平家の侍に伊勢平内左衛門尉が弟に十郎兵衛家員といふ者あり余りのおもしろさにや感に堪ずして黒糸威の鎧に甲をば着す引立烏帽子に長刀をもつて扇の散たる所にて水車に廻し一時舞て立たりける源氏はを見て種々の評定あり是をば射へさか射ましきかと射よと

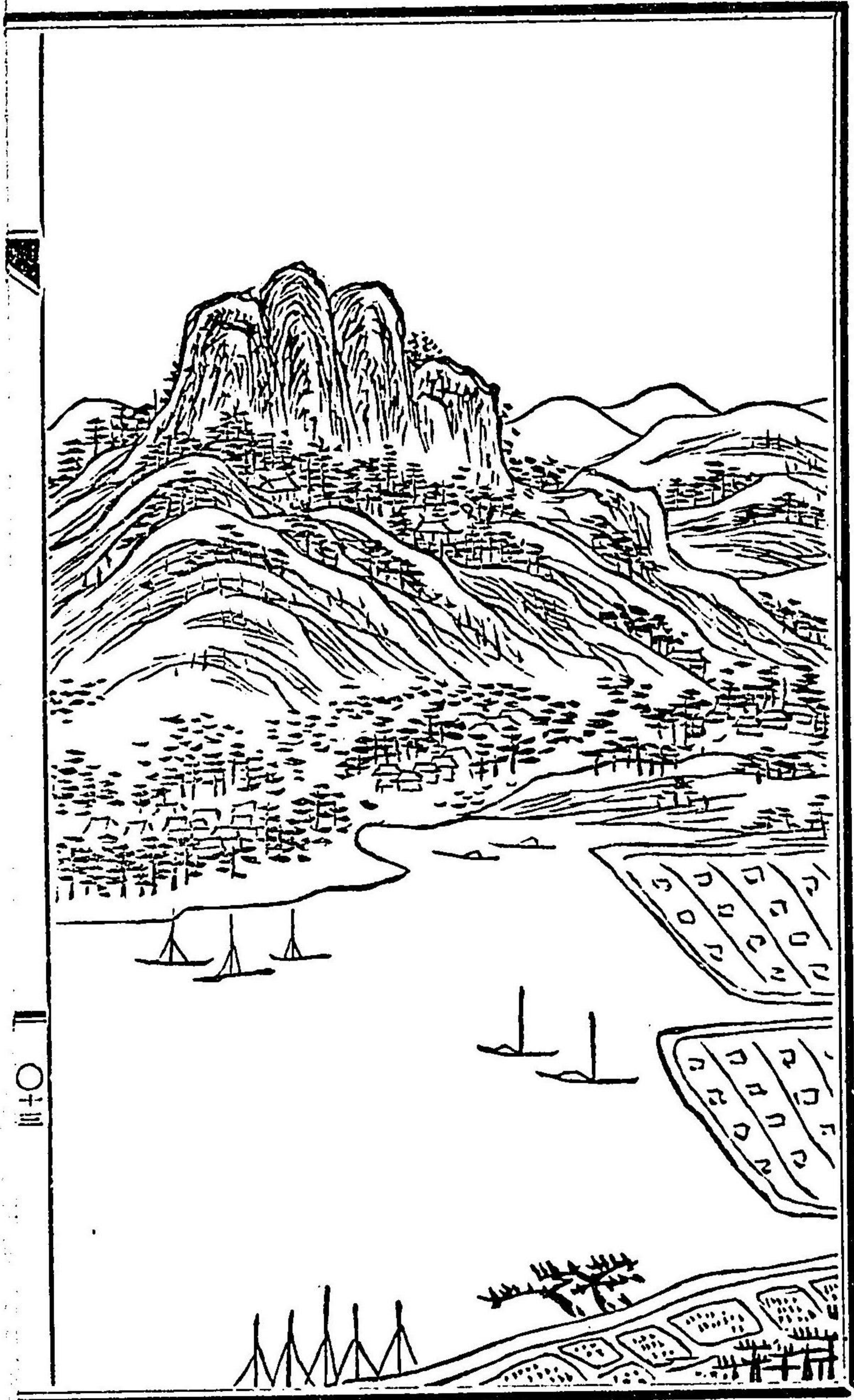
いふ人もありあいふといふ者もあり是ほどに感する者を情なく射へき扇たにも射るほどの弓の上手あれば増て人をば外すべしとはよも思はしなればないふといふ人も多し扇をば射たれども武者をばぬいすされば狐矢にころわれといはんも本意なければ只射よといふ者も多し思々の心あれば口々にどよめきけるを情は一旦の事今一人も敵を取たらむと大切なりとして終に射へさにうさだめける與市は扇射すまして氣色して上りけるを射へさに定めければ又手綱引かへし海にうち入今度は征矢を拔出し九段ばかりを隔つゝ引かためて兵ど放つ十郎兵衛家員か頸の骨をつきさせて真逆に海中へ入にける船の中には音もせず射よといひける者はあゝ射たりくどいひあいふといひける人は情なしといひけれども一時が内に二度の高名ゆゝしかりければ判官大に感じて白総馬に尾花毛馬に黒鞍おいて與市に賜ふ(下略)

○鍛引、弓流しの遺跡 現今其所 詳ならず

盛衰記曰(上略)平家これを本意なしとや思ひけん弓持て一人楯ついで一人長刀持て一人武者三人渚により源氏こゝを寄よとぞ招きける判官安からぬ事あり馬強あらん若武者ども馳寄て蹴ちらせと宣へは武藏國住人美尾屋十郎同四郎同藤七上野國住人丹生四郎信濃國住人木曾中次五騎列て喚でかゝるまづ楯の陰より塗壁に黒羽作たる矢を持て眞先に進みたる美尾屋十郎が馬の左の鞅盡しを筈の藏るゝほどにぞ射籠たる屏風を返すやうに馬はどうと倒るれども主は弓手の足を越へ馬手の方へ下り立て頓て太刀をぞ扱たりけるまた楯の陰より大長刀うち振てかゝりければ美尾屋十郎が小太刀大長刀に叶はじとや思ひけん貝吹てにげければ頓て續て追かけたり長刀にて薙んずるかど見る所に左はなくして長刀を弓手の脇にかいばさみ馬手の手をさし延て美尾屋が甲の鍔を掴むつかまれじと逃る三度搦はづいて四度の度無手と掴むしばしぞ搦て見へしが鉢付の板よりふつと引切てぞ逃たりける殘る四騎は馬を惜んで懸らず見物して居たりける美尾屋十郎は御方の馬の陰に逃入て息繼て居たり敵は追ふても來らず其後甲の鍔を長刀の先に貫きさし上大音聲にて遠からん者は音に

もきけ近きは目にも見たまへ是ころ京童の喚ある悪七兵衛景清よと名乗すて、御方の楯の陰へ不除にける平家はをもつて少し心地を直し悪七兵衛討す者ども景清討す者續やと二百餘人渚に上り楯を唯羽につきあらへ源氏こゝに寄よとぞ招きける

同書云判官勝に乗て馬の太腹まで打入て戦ひけり越中次郎兵衛盛嗣折を得たりと悦び大將軍に目をかけ、熊手を下し熊手を懸んどうち懸たり判官鍔を傾けて懸られじと太刀をぬき熊手をうち除けくするほどに脇に狹たる弓を海にぞおとしける判官は弓を取て上らんとす盛嗣は判官を懸て引かんとす如法危く見へければ源氏の軍兵あれいかにかく其弓拾給へくど聲々に申ければ太刀を以て熊手を會釋ひ左の手に鞭を取て搔寄てろ取てあがる軍兵等は假令金銀をのべたる弓なりとも如何に替させ給ふべき淺猿くと申ければ判官は軍將の弓とて三人張五人張あらば面目なるべし去ども平家に責付られ弓をおとしたりとてあち取こちとり強さず弱さず披露せんと口惜かるべし又兵衛佐のもれさかにも云甲斐なれば相構へて取たりとのたまへば實れ大將なりと兵舌をふるひけり(下略)



許古岩眺望
中運河

○總門跡 同所田畝の中にあり平家は一ノ谷を遁れ西海の波にたゞよひ終に當國に渡り諸將を分ち屋島を守らしめ此邊に護衛の諸將陣營を置き此所に總門を構へしが義經裝ひ來れば平家は船に移り源氏の諸將此所に陣を置き却て源氏の總門となせり其後星霜を経て遺跡殆んど埋滅せんとせるを以て舊藩主始祖衛門を造らしめ以て之れを表すと云ふ

○射落島 同所總門の南數十歩の所にあり佐藤嗣信、能登守教經の爲めに射落されし所なり

○鎌田光政之墓 其所在詳あらず本村中古墳多し光政其他戦死の者を埋めし所ありと云ふ
盛衰記元暦二年二月廿日屋島合戦の條下にいはく此に常陸國住人鹿島六郎宗綱、行方六郎、鎌田藤次光政をはじめとして十餘人は討れにけり(下略)

○六萬寺 同所にあり律宗寒川郡鹽芝寺の末寺あり
寺記曰當寺は天平二年行基菩薩詔を奉し此所に一字を草創して國豐寺と号す後七堂伽藍併りて藥師の銅像六萬軀を作り安置せしを以て六萬寺と稱す塔頭も四十二坊ありしが今は廢唯地名にのみ存せり壽永二年七月廿五日 安徳天皇三種の神器を擁せらし西海に行幸

ありて宇佐の宮を行在所とし平家の公卿太宰府にありて時を待けるに豊后の賊尾形三郎維義太宰府に寇し來るを以て鳳輦を奉し四國に狩し給ふ時阿波民部大輔重能船を具し當國に遷幸せしめ此寺を以て行宮と定めけり此年閏十月三日公卿咏歌ありしを此寺の柱及び障子に題せられたり

嬉しくも遠山寺に尋ね來て後のうき世を洩しつるかな 中納言重衡
うき世らは此山寺にすみ染の衣の色を深くうめむ 阿闍梨祐圓
世中はむかしかりとなりぬれど紅葉の色は見し世あり 但馬守經政

其他多く題詠もありしが此三首のみ残りしを天正十二年長曾我部元親當國を侵掠せし時此寺に來り此題詠を見て大に感し直に志度の方へ赴きけるに元親の歩卒火を失し堂塔盡く烏有に歸し此題詠も焼亡せしかは元親此歩卒を寒川郡大町村に於て誅殺せしと云ふ

○源氏峰 同所八栗山の續きにあり義經此峰に登り兩陣を望みし所あり
○佐藤次信墓 同所にあり寛文二十年舊藩主松平頼重此墓及び大夫黒の墓をも碑石を建設せ

り初此墓山上にありしが其所に池を築きし時今の地に移せり此時普請奉行大西治三右衛門なる者土中より太刀を堀出し之れを藩主に獻せしが即治三右衛門に與へり後外孫夏目治右衛門に傳へ治右衛門當時の儒員後藤世鈞(號芝山)の記文を添へ寒川郡志度村志度寺へ寄付すと云

東鑑 曰元歷二年二月十九日癸酉(中略)于時越中次郎兵衛尉盛嗣五郎兵衛尉忠光平氏等。下自船而陣宮門前。合戰之間廷尉家人次信被射取一畢。廷尉大。悲歎。囑一口衲衣。葬千株松本。以秘藏名馬。号大夫黒。元院御廐御馬也。行幸供。賜件僧。是撫戰士之計也。莫不美歎。云々

○大夫黒墓 同所次信の墓側にあり此馬次信が戦死の時義經文書を添へ志度寺覺阿上人に贈りしに一日逸れて之く所を知らず終に次信が墓前に斃れたりと云元祿十六年舊藩主松平頼常儒臣十河保定をして碑銘を作らしむ

天下名馬莫若、與。與之良者莫若此馬。藤鎮守府秀衡好騎之。及源廷尉義經去

○與。秀衡割愛ヲ贈之。初名ニ淡墨ト。廷尉其爵大夫因曰ニ大夫黒。涉宇治川漲テ。蹈ニ谷ノ峻巖。所ノ謂臨陣ニ無敵。一心成レ功者也。廷尉葬ニ佐藤嗣信。請レ僧施以ニ此馬及太刀。蓋深感ニ其忠勇也。及此馬死。加レ帷埋ニ諸次信墓側。漢明建ニ白馬寺。宋祖使レ賦ニ赭白。皆報ニ其勞也。又詩家云。千載詩人拜ニ蹇馱。杜甫所レ騎猶拜之。况此馬與レ將。一心成ニ大功。豈可。以ニ畜産ニ賤之哉。先君既。命。刊。石。表。其墓。今公又命。臣作。銘。可。謂。恩。及。禽。獸。矣。

銘曰 織毛如、唇 色淺驪分 比物超、光 執權奇分 轡之柔矣 閑且馳、分 遐、酢ニ爾ノ勞ニ 爲ニ建レ碑ヲ分

元祿十六年歲次癸未 臣十河保定謹撰

○宇龍山 同所にあり或は瓜生山とも稱す義經阿波國勝浦より此所に來りしが此山の下より屋島の麓まで沼地なれば容易に渡るを得ざるよし東鑑に見へたり

○菜切地藏 同所にあり武藏坊辨慶士卒の爲めに此地蔵の背にて長刀を以て菜を切しと云

○長刀泉 同所にあり辨慶長刀にて堀し井戸なりと云ふ此井戸並に菜切地藏等の事恐らくは後人の牽強附會せしものあつん

○相引 山田郡瀧元村にあり卷首に南方は畿に一帶の淺水を以て陸地と隔絶すと書せしは即是あり此所潮満ち來る時と潮の干る時と双方へ引分れ兩軍交綏の狀を成す所謂謠曲(八島)に相引にひく潮とあるは此處あり生駒氏本國を領せし時此所に堤を築き鹽田と爲せしが松平氏封を移すに及んで讃岐守賴重命して堤防を廢し浚濬して小川と爲し舊跡を表章すと云ふ

○赤牛崎 同所にあり

盛衰記曰源氏牟禮高松の間宇龍が岡に陣を堅め源平兩陣の間三十余町なり屋しまの城を見わたせば島の廻り廣海漫々として巖石雲に聳て左右あく源氏軍兵渡すべきやうあし然るに折節高松村より赤牛渡りけるを義經見給ひ是則入幡大菩薩の御告と深く祈念をあし其瀬のゐるををしりて三月廿日卯の刻に源氏五十余騎屋島の城に責寄と云々

○鞍掛松 同所にあり義經此松に鞍を掛け憩ひし所と云ふ

然ども地形を按すれば當時此所は或は海中たるも知る可からず蓋し後人附會の説ならん

附 録

前編は専ら屋嶋一山及源平古戰場に關係せる事蹟を列擧せしも猶近傍名所舊跡の歴史に傳へ人口に膾炙せし者少からざれば更に之れを掲げ以て附録とす

○八栗城跡 三木郡牟禮村八栗山上にあり中村藏人宗卜之れに居れり初宗卜田井の城に居しが同城焼失せしを以て其傍に廬舎を營み住居せしも當時土佐の長曾我部元親當國に亂入し猛威を振ひし際なれば群臣と謀り且神佛に祈り更に此城を築き天正十一年四月を以て士卒三百人と共に此城に移住す既にして長曾我部氏裨將數珠掛孫兵衛久重をして一千余人を率ひ之れを攻めしむ時宗卜自から鳥銃を提々城門に登り孫兵衛を一撃の下に斃す是に於て土佐の兵敗走せり宗卜窺かよ以爲く一日勝を全ふすと雖ども衆寡の敵せざるを知つて永く此城に據るは智にあらざると即夜竊に城を出て艇に乗り備前國に退く是時安地野を通過せしが日將に暮れんとし偶々杜鵑の鳴きければ

鳴わらる末はいつことほごきす駒をはやめてしたひ行かき

自後見島郡林村に開居せしが天正十四年仙石權兵衛秀久の招に應じ當國に歸り同年冬秀久に隨ひ豊臣秀吉西征の軍に伍し豊後に戦ひ大に功あり仙石氏國除するに及んで又尾藤甚右衛門に隨ひ筑紫の役に赴きしが尾藤氏滅亡の後本村に住し薙髮して名を宗卜居士と改め老を養ひ後終に病を以て没す其墳墓依然本村にありと云

○土肥屋敷 同所にあり

源平合戦の時土肥次郎實平の陣營とせし所と云元文年間其地を堀り古銅印を獲たり文に眞と云古色蒼然たり蓋實平の印あらん今同村六萬寺に藏せり

○神櫛王墓 同所にあり

王は景行天皇の皇子にして讚岐國造たり從來土俗王墓と稱せし古墓一基榛荆の中に兀立せしが舊藩主讚岐守松平頼聰人民の之れを汚さんとを恐れ乃ち朝廷に奏し之れを修繕し更に一大碑を設立す

從四位上行左近衛權少將兼讚岐守源朝臣頼聰謹撰并篆額

大國之國造小國之國造是之國造者國國處爾持分居氏朝廷乃御坦登奉仕氏枯野之小船不輕職爾左祁理故懸麻久毛畏伎

天皇賀御子等袁毛封賜氏玉藻吉吾讚岐國國造乃祖 神櫛王者纏向之日代宮爾治天下斯

天皇命能御子爾那毛坐祁流如此氏玉匣三木郡武例鄉爾千引石衝立而在與柳有祁理是者此王能御墓爾在祁理璞能經年隨爾遷去氏退紅能不有狀爾斯母成去而雖有其地哀王墓登叙言祁流恐哉如此在空數凡那良奴地能如此氏在牟波手引之絲甚毛惶久甚毛慨伎事爾夜毛不有是以御執之梓乃眞弓思起氏如此那母奉治祁流故自今者行路人毛不奉侮住居邑人手不奉穢 王能御靈毛如何爾宇流波志美思須良牟登其事由袁樞實乃一件此石面爾書誌須爾那母

明治二年歲次己巳夏五月

源頼顯謹書時年六十有四

○喜岡城跡 山田郡古高松村にあり其墟今寺と爲り喜岡寺と稱す高松三郎頼重以後其子孫連綿之れに據れり左馬助頼邑の時天正十一年長曾我部元親讚岐の諸城を攻奪し土豪皆元親

に服従す頼邑も亦元親に従ひ君臣の禮を執れり同十二年仙石權兵衛秀久讃岐の守護となるに及んで來り攻む勝すして退く同十三年四月廿六日豊臣秀吉浮田黒田の諸將に命し來り攻めしむ時香西氏の援兵として片山志摩唐人彈正等亦來り救ふと雖も城終に陥る此日頼邑並に志摩彈正及士卒戰死する者二百餘人

○長塚 同所田畝の中にあり城中戰死者二百餘人を葬むりし處と云

○高松左馬助頼邑墓 同所の西大櫛にあり

元龜天正之間。海内繹騷最甚。迨豊臣氏。闕然一慄。震驚四方。如雷如霆。餘威振海外。若秦元親強暴。南國草偃。其餘舌縮股慄奔潰。獨不屈其威者。藁爾喜岡城而已。事詳于前載。容舉其要。城主左馬助諱頼邑私諡道勝。所謂高松三郎頼重之胃。而世食于高松郷。居喜岡城。仙石秀久受封於讚。先至攻此城。弗克而還。明年豊氏命浮田黒田等七師。將兵二萬三千人。征讚岐。先伐此城。彈丸黒子地。雖片山志摩唐人彈正率兵救之。而城中僅二百餘人。螻蟻隆車。不足以喻矣。於是主將

與志摩彈正。同心決命守。三將振臂一呼。士咸佻飛鏃。胃白刃。血戰而斃。視死如歸。豈非發士有素而得其死力。如斯乎。嗟乎。三子完志節。死之。胡可不合。笑于泉下哉。彼不以德而以威。宜乎其効死。而不服也。世稱之曰三烈。比諸許男面縛絞人城下之盟。豈止天淵而已矣哉。是時天正十三年四月廿六日也。其墟今爲寺曰喜岡寺。住持龍客曰。恐後世墳塋埋沒。精魂無依也。故欲立碑而表之。且使四方之士。過此者。感遠慨然。永懷其遺烈。焉使一人遠請文於予。予深嘆其用心之厚。爲之銘曰。

猛將如雲矢如雨。十雉孤危猶一蚊。力雖窮志不可奪。嗟烈士沒有餘欣。從四位下行待從清原朝臣宣光撰

○片山志摩墓 同所喜岡寺の北にあり

君姓藤諱俊秀稱志摩。父首藤玄蕃。明應中。自紀來讚。屬香西氏。食采鷺田城片山。因氏焉。天正十三年四月廿六日。豊臣公師以二万三千人。伐喜岡城。君及唐

人彈正救之。與高松左馬助共守。猛將勅敵蟄集。激矢如雨。撥鋒成林。嬰城者僅二百餘人。兵盡力窮。君與左馬助彈正死之。嗟三子。投命詢節。雖張巡許遠。何以加旃哉。銘曰。

其城可陷。志不可奪。義立守禦。身沒鋒括。

讚州處士菊池武賢庭實謹撰

○唐人彈正墓全上

碑文曰

天正十三年四月二十六日。戰死於喜岡城。香川郡上村城主

○屋島神社 同郡東瀛元村にあり

寛永中高松藩祖松平頼重東照大神の祠を香川郡宮脇村に創建す八世孫讚岐守松平頼儀に及んで文化十二年此に遷す其祠宇の制日光廟に模倣すれば壯麗知るへきあり明治七年九月官命して縣社に列し同十五年十一月更に舊藩祖從四位左近衛少將源頼重公を合祭す

屋嶋神社碑

文部大臣從二位勳一等子爵海軍中將榎本武揚篆額

香川縣知事從四位勳四等林董撰文并書

今上孝敬。慎終追遠。修祠廟。奠神階。自公侯。至士庶。先世有功德者。皆列祀典。風化所及。海內士民。興敬興孝。董竊以爲。屋嶋神社之所。以永久而彌昌者。蓋以此也。昔者高松藩祖源英公。創建東照宮祠於讚岐香川郡宮脇村。文化十二年。八世孫頼儀。移之於山田郡東瀛元村。明治七年九月十五日。官命列縣社。號屋嶋神社。於是衆相議曰。祠即公之所。而公英邁。克肖東照宮。不可不以不配享焉。乃請之於官。見許。十五年十一月十二日。遷公遺影於此。夫東照宮。鴻業有不待言者。而源英公。勳建基業。經紀南服。其功德不可沒也。謹按公諱頼重。水戶中納言頼房長子。贈大納言諱光圀同母兄。於東照宮爲孫。姓源。英公其諡也。寛永十六年。封常陸下館五萬石。尋叙從四位下。任侍從。十九年。徙封於此。食十二萬石。

二十年。開_レ牧場於寒川郡大串山。明年。埋_レ樋於高松市中。縱橫引_レ泉。俾_レ民飽_レ飲。又明年大旱。新設_レ陂池四百有六。慶安元年。畜_レ牛於庵治小島。所謂野牛島是也。後又修_レ道路。築_レ河堤。殖_レ山木。拓_レ海墾。今本州鹽田爲_レ海內所_レ推。實發_レ端於公。不特此。崇_レ明祀。重_レ儒術。舉_レ賢良。褒_レ忠義。風教大行。爲_レ幕府巡檢使所_レ稱揚。明曆二年。後西院天皇即位。公代_レ大將軍入_レ朝賀。獻_レ金銀棉帛。天皇嘉賞。賜以_レ御劍。特詔叙_レ從四位上。拜_レ左近衛少將。公感激。益尊_レ奉_レ王室。嘗修_レ白峯陵。納_レ祀田。上_レ書幕府。請_レ舉_レ朝覲舊典。凡此功德。足以_レ廟_レ食千載矣。初祠宇之建也。其制模倣日光。壯嚴可知焉。後六十年。王政維新。藩侯納土徒_レ東京。臣子之在國者。奉祀惟謹。及_レ配_レ享公。益加修治。所謂光德講者。募_レ義金。永供_レ粢盛。是亦敬之至也。董拜_レ香川縣知事。之三月。衆與_レ公裔孫正四位伯爵松平君_レ相議。樹_レ碑社前。求_レ文於董。董幕府舊臣。於_レ公與_レ東照宮_レ祀事。不可_レ辭。於是。宿齋往拜_レ其祠。祠在_レ山麓。正南面。陽。翼然秩然。使_レ人肅然起_レ敬。而山勢吼肆。樹色翳蔚。景致可愛。因論_レ衆曰。

夫所謂屋島者。源平戰爭之地。當時衆心疑懼。草木皆兵。是其可畏。不是可愛。嗚呼。均是山也。對_レ之者。一懼一樂。古今異_レ情。諸君知其由_レ乎。衆合辭答曰。雖_レ由_レ英公與_レ東照宮_レ之賜_レ乎。抑又_レ聖天子之賜也。董喜。乃謹記_レ之。且系以_レ詩曰。
不_レ驚不_レ崩。 譖山葱々。 不_レ波不_レ瀾。 譖水溶々。 千秋萬歲。 民有_レ思_レ公。
天人相應。 公祿無_レ窮。 公在_レ廟位。 朝思_レ年豐。 公在_レ堂與。 暮思_レ俗隆。
春秋從享。 陪_レ於_レ烈祖。 明神隆格。 考々共鼓。 譖人匪_レ懈。 觀賽縣々。
祭以_レ時物。 山美海鮮。

明治二十二年九月

○屋島燒 同郡西瀧元村にて製造す

明和三年の頃寒川郡志度村に三谷林更なる者あり始めて種々の陶器を創製せしが同七年の頃平賀源内と協議し大に改良を加へ其後安永五年三木郡平木村に移住し終に此所に轉住

す後又京都樂吉左衛門の弟子清兵衛なる者を迎へ其法を學び且屋嶋古戦場の土を以て之れを造れる故世に之れを屋嶋樂焼と稱し其名近國に聞ゆ林叟は寶曆元年を以て生れ嘉永元年に没す其長壽知るべきあり今の戸主林造ある者は其曾孫ありと云

○鹽田 同所にあり

當國は北方海に傍ふを以て各郡鹽田の設けあらざる所なく其産出の夥多なる世人の知る所にして當國の一大物産たり然して本地の産出は中に就て尤も品質優等あり抑本地の鹽田は寶曆五亥年梶原某なる者之れを創設す之れを亥の濱と稱す後天保五年に至つて舊濱命して更に増設せしむ之れを新濱と云ふ反別合計九十七町三反九畝一步にして一ヶ年平均十一万二千五百石を産出す

○平家鹽 壇ノ浦に産する處の鹽にして其甲狀鬼面の如し土人呼んで平家鹽と稱し平家の靈海に入つて化して蟹となると傳ふ俗説固より取るに足らずと雖も亦一奇蟹なり

明治三十一年四月九日印刷
全年全月十四日出版

〔定價十五錢〕

版權出願中

發行所

香川縣高松市大字五番丁六十三番戶寄留
熊本縣土族
屋嶋保勝會代表者

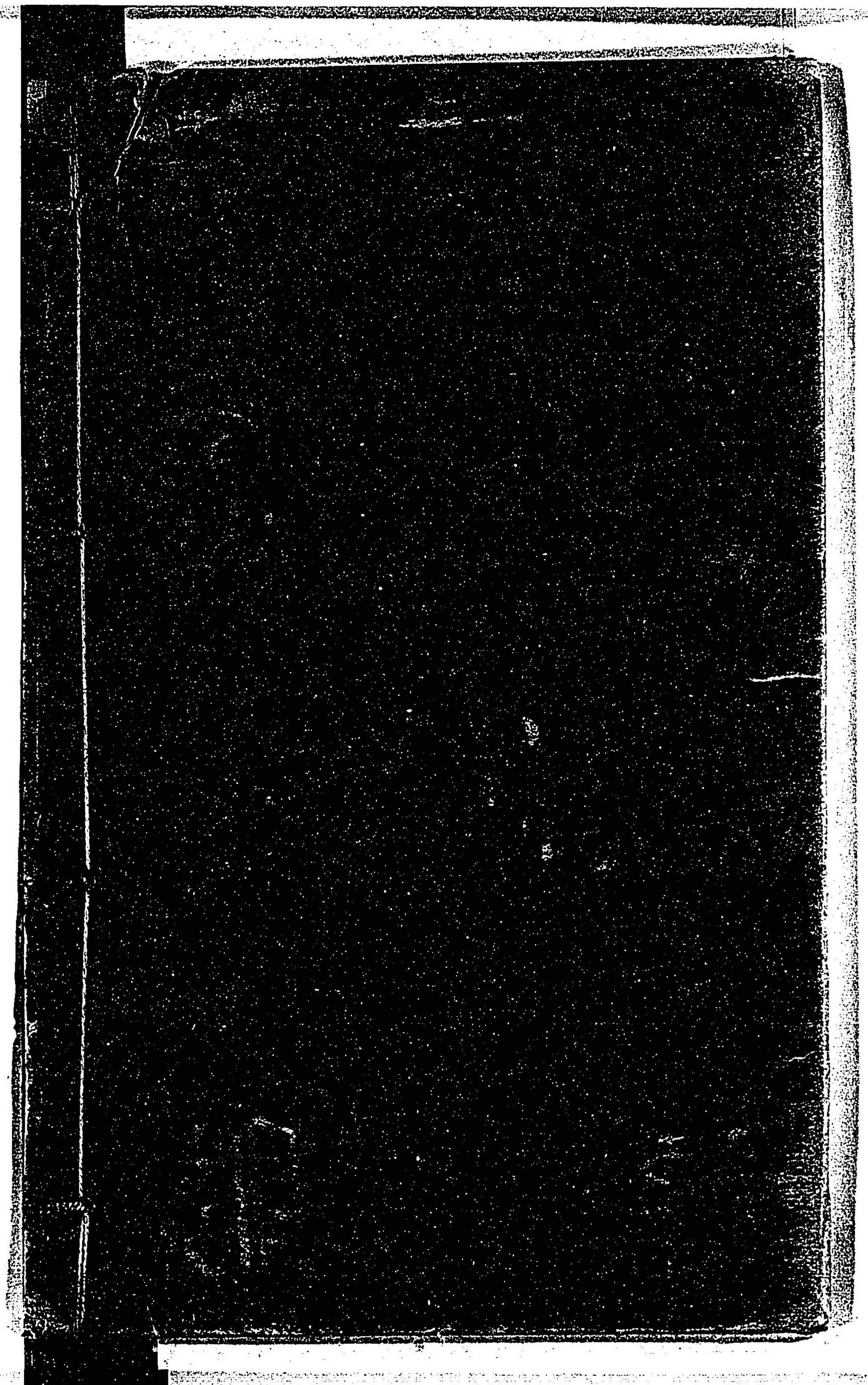
中村 事

香川縣高松市古新町百一番戶

印刷人 森田文七

印刷所 香川新報社印刷部

69
108



屋島名勝手引草 完

69
108

026129-000-1

69-108

屋島名勝手引草

中村 事 / 編

M31

ADC-3800

